

「パミール」について

日本の地図帳に記載されている「パミール高原」は、「パミール」と訂正した方が良いとする提言。

(写真の番号は 2～8 頁の記述と 9 頁の地図内の番号に対照する)

パミールの輪郭

パミールは中央アジアの中央部にあり、北部より天山、南東部よりクンルン、南南東部より大ヒマラヤ（カラコルム山脈を含む）、南西部よりヒンズークシュがつながる、結び目のようなところが、パミールである。

パミールの北端は、アライ山脈とザアライ山脈の間を流れる北緯 39.5 度のキジル・スウ川（アライ谷）で区切られ、南端はワハン山脈とヒンズークシュ山脈の間を北緯 37 度線にそって流れるピャンジ川とワハン・ダリア川（ともにアム・ダリア河の支流）で区切られている。東端は東経 75.3 度で北から南へ走るクングル・ムスタグ山脈東麓で区切られ、西端は東経 70 度で終わるピョートル一世山脈の末端で区切られる。

この輪郭は南北約 300 キロ、東西約 400 キロのほぼ長方形をかたち造っている。

パミール東部、西部、南部

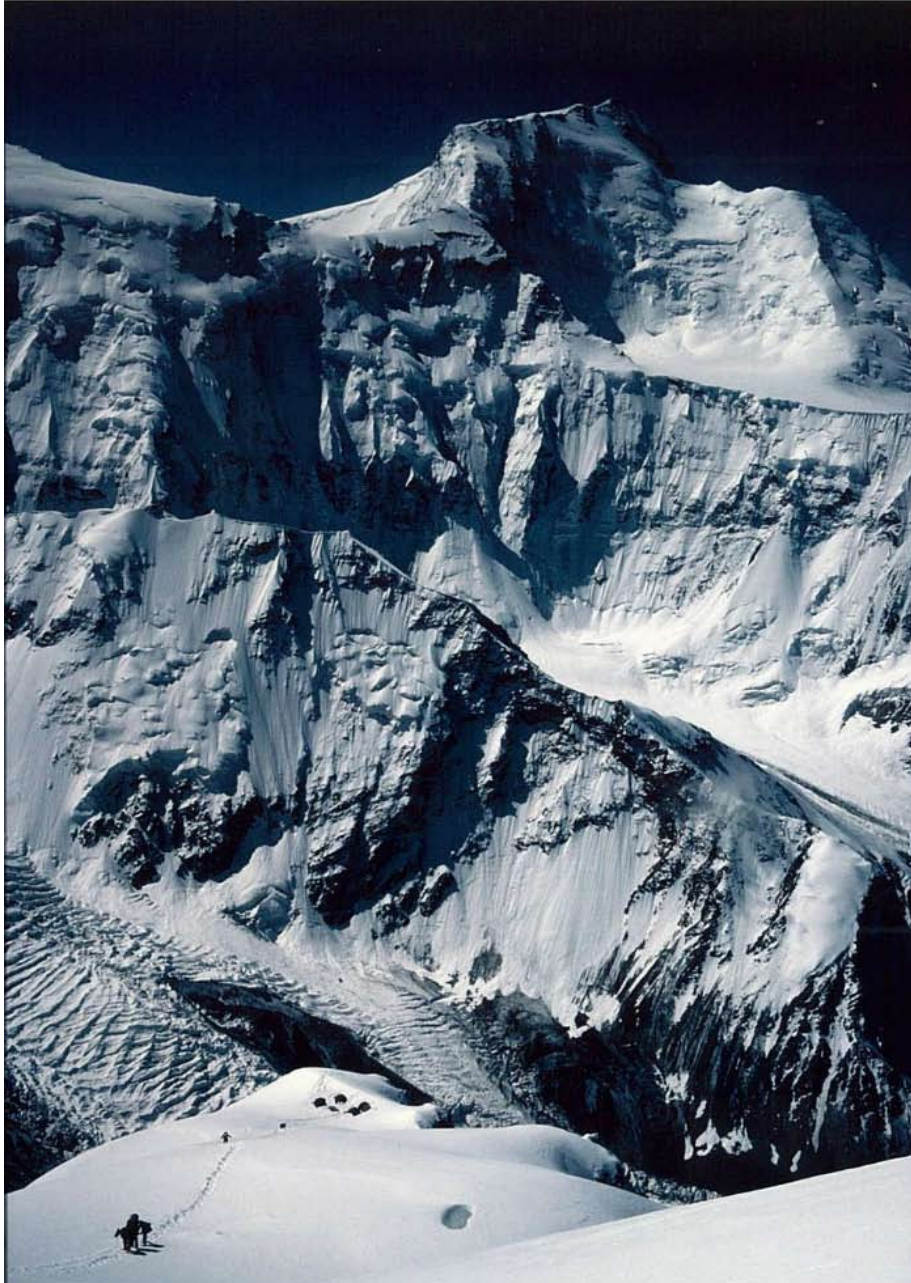
パミールの地形を概観するのに、便宜上東部、西部、南部の三山域に分けて考察したい。



①ムスタグ・アタから見たクングル峰 [近藤和美氏撮影]



②ムスタグ・アタ 左側が主峰 [絹川祥夫氏撮影]



左 ④ソモニ峰 上 ソモニ峰（奥）と⑤コルジェネフスカヤ峰（左手前）〔近藤和美氏撮影〕

パミール中央部をキルギスのオーシからタジクのホログまでパミール公道が縦断している。即ちキルギスの南部にあるオーシから南下しタジクに入りカラ・クリ湖東岸を通りムルガブに達し、少し南下し逆L字型に西行しピャンジ川東岸にあるタジクのホログまで続くこの公道を、便宜的に東部、西部、南部に分ける分割線にしてみる。

東部には中国領のクングル①(7719 m)、クングル・チュベ(7595 m)、ムスタグ・アタ②(7546 m)の七千m峰が三座ある。

西部にはタジクとキルギスの分水嶺にシノ峰③ (Abu ali ibni Sino =

アビケンナ、略して「シノ」。前**レーニン峰**、7134 m)、タジク領に**ソモニ峰**④ (前**コムニズム峰**、7495 m)、**コルジェネフスカヤ峰**⑤ (7105 m) の三座がある。更にここには驚くべきことに全長 77 km の世界最長の山岳氷河、**フェトチェンコ氷河**⑥もある。またこの氷河の源頭には**レヴォリューチャヤ峰**⑦ (6974 m) がある。

南部には急峻な岩壁と氷壁の名だたる**マルクス峰**⑧ (6726 m)、**エンゲルス峰**⑨ (6510 m) がある。

[高度はいずれも「コンサイス辞典外国山名辞典」三省堂 による]

パミール全域で七千m峰が六座を数える。

尚、地球上で七千m峰以上を有する山脈は、大ヒマラヤ (カラコルム山脈を含む、八千m峰 14 座)、ヒンズークシュ (七千m峰約十座)、パミール (七千m峰六座)、天山 (七千m峰二座)、クンルン (七千m峰一座) であり、パミールは第三位を占める大山岳地帯である。

この大山岳地帯に例えば志賀高原や霧ヶ峰高原などというような、ロマンチックな「高原」という付属語を付けるのは似つかわしくないと思われる。

ましてやパミール山塊の地形がすべて明らかにされ多数の海外の登山家が訪れる様になった昨今、わが国でも速やかに「パミール」とすべきではないだろうか。

ただしパミールの一部であるパミール公道及びアクスウ川、パミール川などの周辺地帯は盆地地帯であり、この部分にはパミール高原、又は高地という呼び方も出来るかもしれない⑩⑪。

しかし、総合的に見れば、パミールは山脈、高原、盆地、溪谷、峽



③シノ峰 (レーニン峰) (右) BC より [近藤和美氏撮影]



⑩ピョートル I 世山脈 [『パミール』ベースボール・マガジン社 より 田村俊介氏提供]



⑬科学アカデミー山脈西面 ④ソモニ峰 (コムニズム峰) (右) と⑤コルジェネフスカヤ峰 [渡辺悌二氏撮影]

谷などの集合体であると言えよう。

なお、アンデス山脈、ロッキー山脈、デナリ峰等のある南北アメリカ大陸、ヨーロッパ・アルプスやカフカスには七千m峰は一座も無い。

また付言すれば、『広辞苑』では第3版までは見出し「パミール」の定義は「中央アジアの大高原。……」とあり、自然地形の説明であるが、1991年の第4版以降は「中央アジア南東部の地方。チベット高原の西に連なり、海拔七千メートル級の高峰を含む諸山系と高原から成り、世界の屋根といわれる。大部分はソ連のタジク共和国に含まれる。葱嶺（そうれい）」となっており、地域名称の解説と変わった。



⑥世界最長の氷河フェトチェンコ氷河 [『新世紀の中央アジア』パミール中央アジア研究会編より 近藤寿行氏撮影]



左 ⑧マルクス峰 右 ⑨エンゲルス峰 [田村俊介氏提供]



⑦レヴォリューチャ峰 [角張嘉孝氏撮影]

世界の地図帳

それでは世界の地図帳ではパミールはどうなっているか見てみよう。

1、ドイツ語版の地図帳

- ① “Internationaler Atlas” 1991.p86,119,120---PAMIR
- ② “Meyers Grosser Weltatlas” 1933.p120,122---PAMIR
- ③ “Der Grosse Weltatlas” p3,18,183---PAMIR
- “Brock Haus Enzyklopadie” 20---PAMIR

2、フランス語版の地図帳

- ④ “Le Grand atlas du mond” 2011.p3,144,149,153---Pamir
- ⑤ “Atlas General Larousse” 1983.p105,107,115---Pamir
- “Nouvel Atlas Mondial Gisserot” 2014.p46---PAMIR

3、イタリア語版の地図帳

- ⑥ “Atlante Geografico Mondo” Touring Club Italiano ,2008
---PAMIR

4、ロシア語版の地図帳

- ⑦ «АТЛАС МИРА» 1967. с 29--- ПАМИР
- «АТЛАС СССР» 1969. с 29--- ПАМИР

5、英語版の地図帳

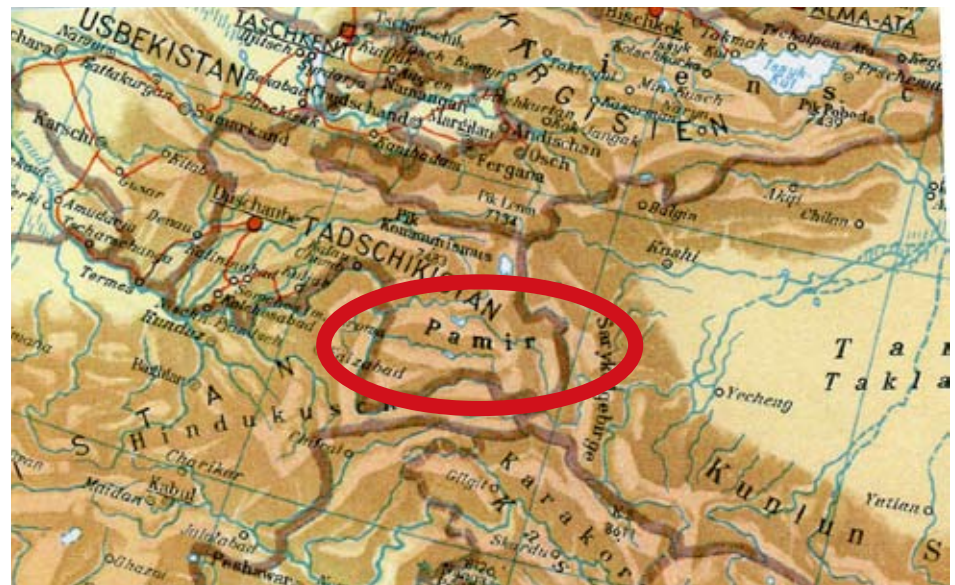
- ⑧ “The times atlas of the world” volume 2,London,1959---PAMIR
- “Oxford comprehensive Atlas of the world” N.Y.,2008---PAMIR
- “Britannica Atlas” Chicago,London,Tokyo,1987---PAMIR
- “Phillip’s modern school atlas” ---PAMIR

6、ポーランド語版の山岳大百科事典 全七巻

- “WIELKA ENCYKLOPEDIA GOR I ALPINIZMU” Katowice,2003-2011,



ドイツ ① Internationaler Atlas



ドイツ ② Meyers Grosser Weltatlas

Tom 2 GORY AZJI,2005,805+x1x---PAMIR

7、日本語の地図帳

“中学校社会科地図” 帝国書院、2014 ,p36,p51---- パミール高原

“新詳高等地図” 帝国書院、2014、p29,p59,p62---- パミール高原

“世界大地図” 小学館、2009、---- パミール高原

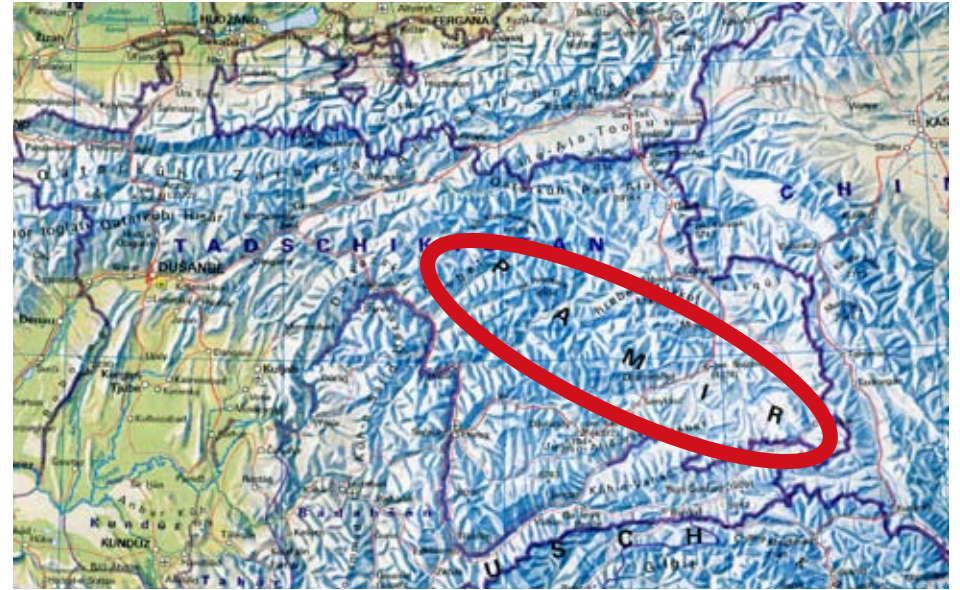
“世界大地図帳” 平凡社、2003、---- パミール高原、Pamir(小さく標記)

” グランド新世界大地図”、人文社、1996、----Pamir(パミール高原)

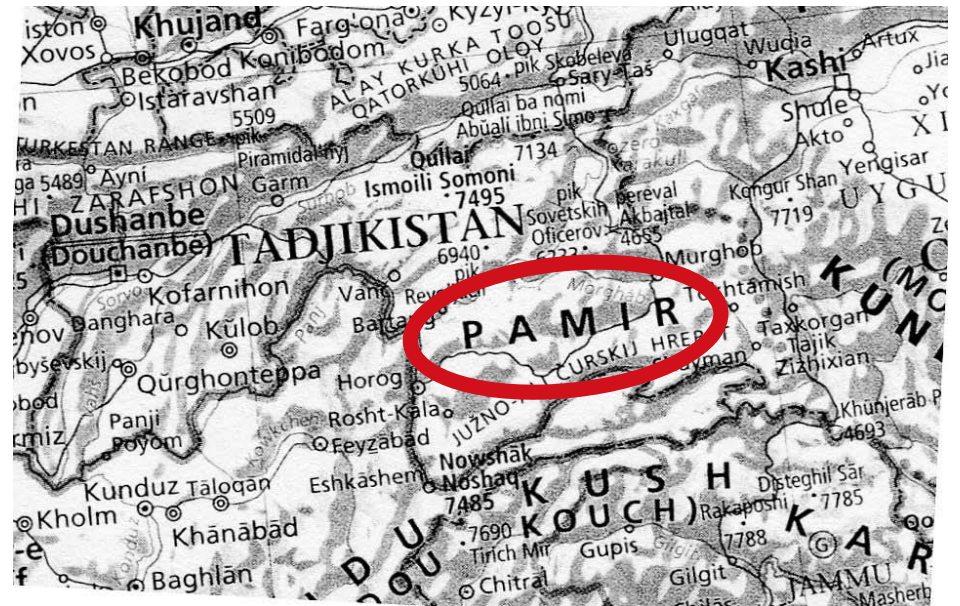
結論

世界の地図帳ではほとんどが Pamir, ごく一部 Pamirs, が使われていて高原を表す Pamir Plateau とか Table-land という表現は今では使われていない。日本の地図帳にパミール高原と記載するのは慣用的に今まで使っていたので、その表現を踏襲しているという出版社編集者の意見であった。ここまで述べてきたようにパミールはその全体を示す時には「パミール高原」ではなく、「パミール」と地図帳の表現を訂正して頂ける事を願って、この一文を記述した次第である。

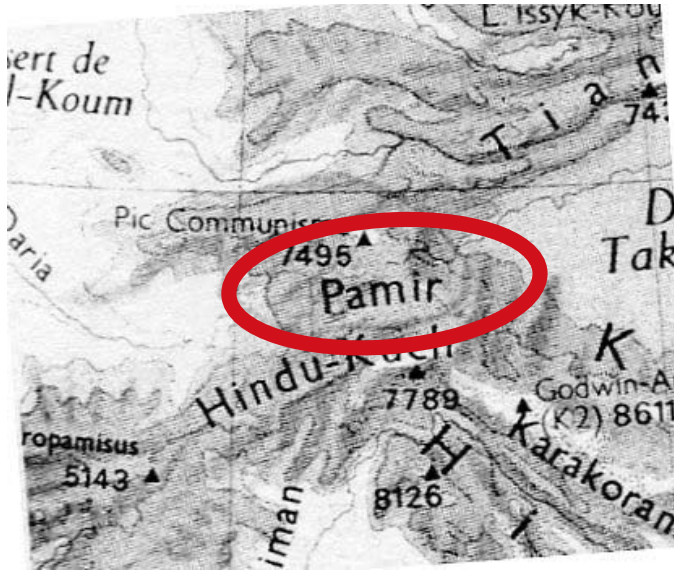
よろしくご配慮をお願いしたい。



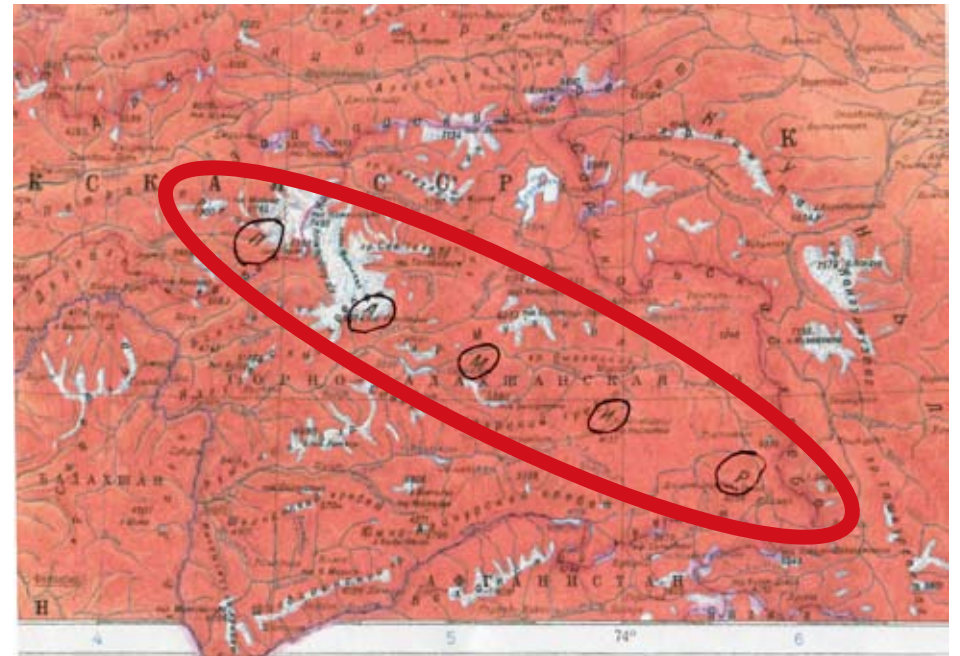
ドイツ © Der Grosse Weltatlas



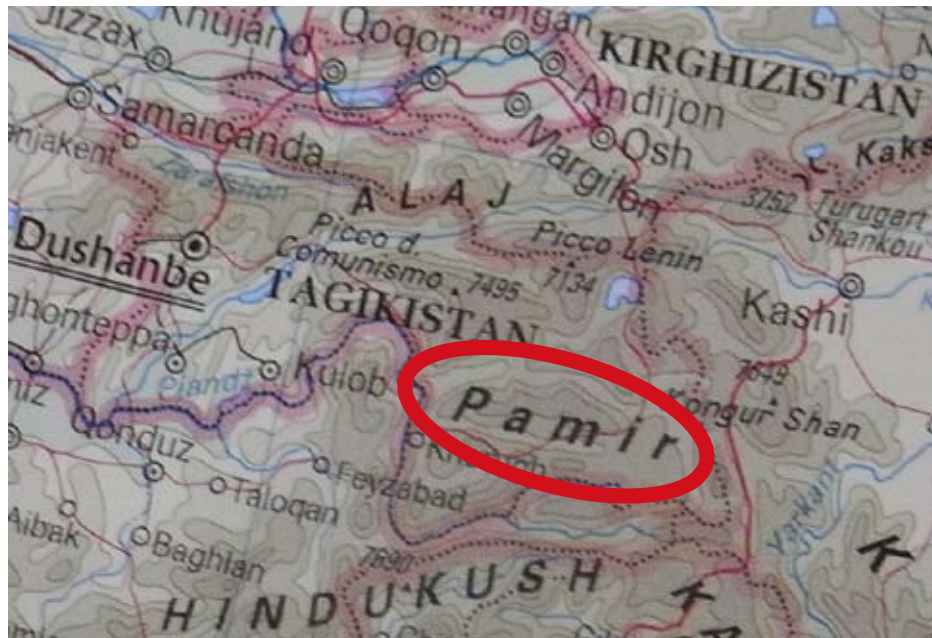
フランス @ Le Grand atlas du mond



フランス © Atlas General Larousse



ロシア ©АТЛАС МИРА



イタリア © Atlante Geografico Mondo



イギリス © Atlas of the World ,Times 2011



⑩高原状の大斜面 標高 4300 m パミール南部ゾル・クル東方オビス・ボリの群れ [本多海太郎撮影]



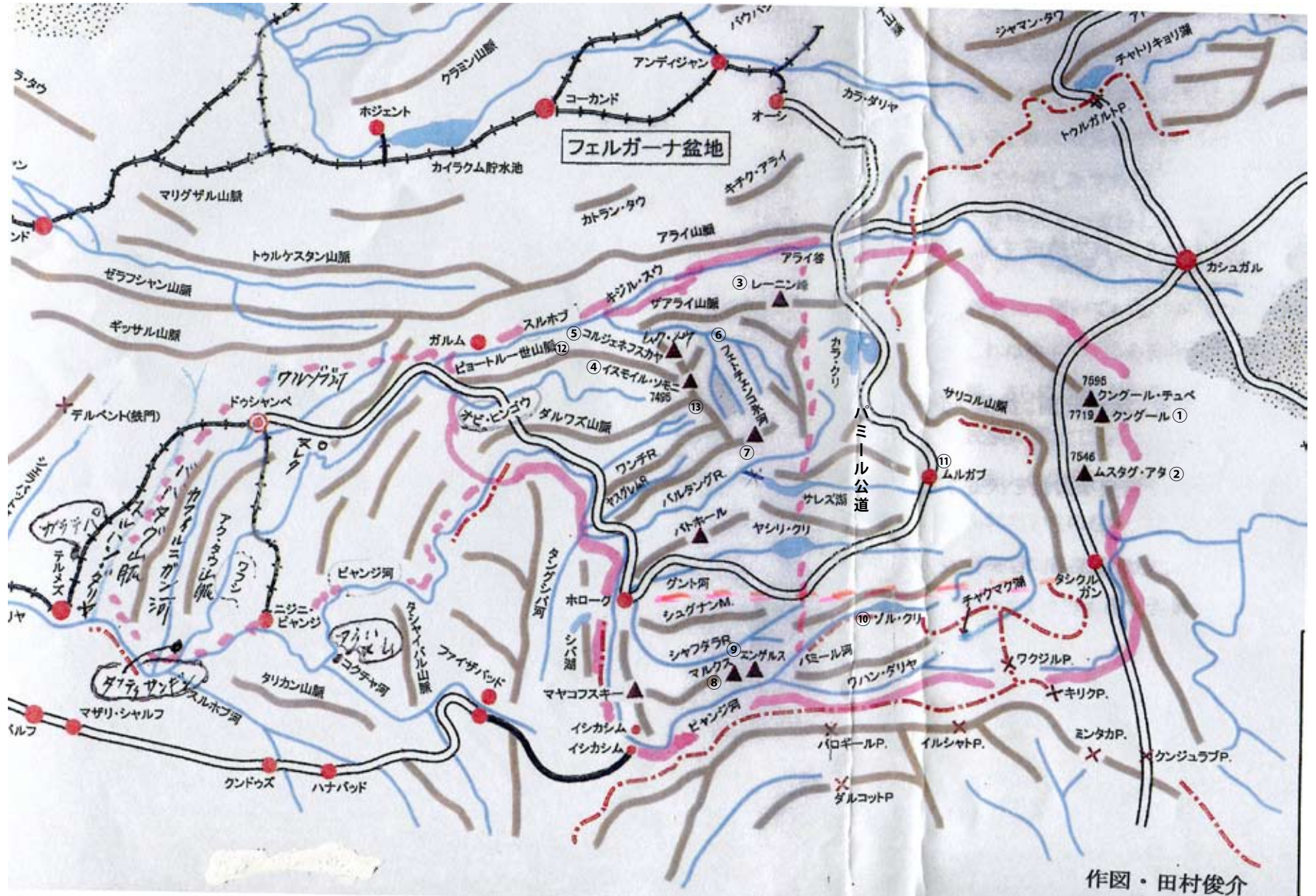
イギリス Bartholomew 1955年のもの。この時はまだ Plateau となっている。



⑪盆地状のパミール東部の中心地ムルガブ 標高 3600 m [本多海太郎撮影]

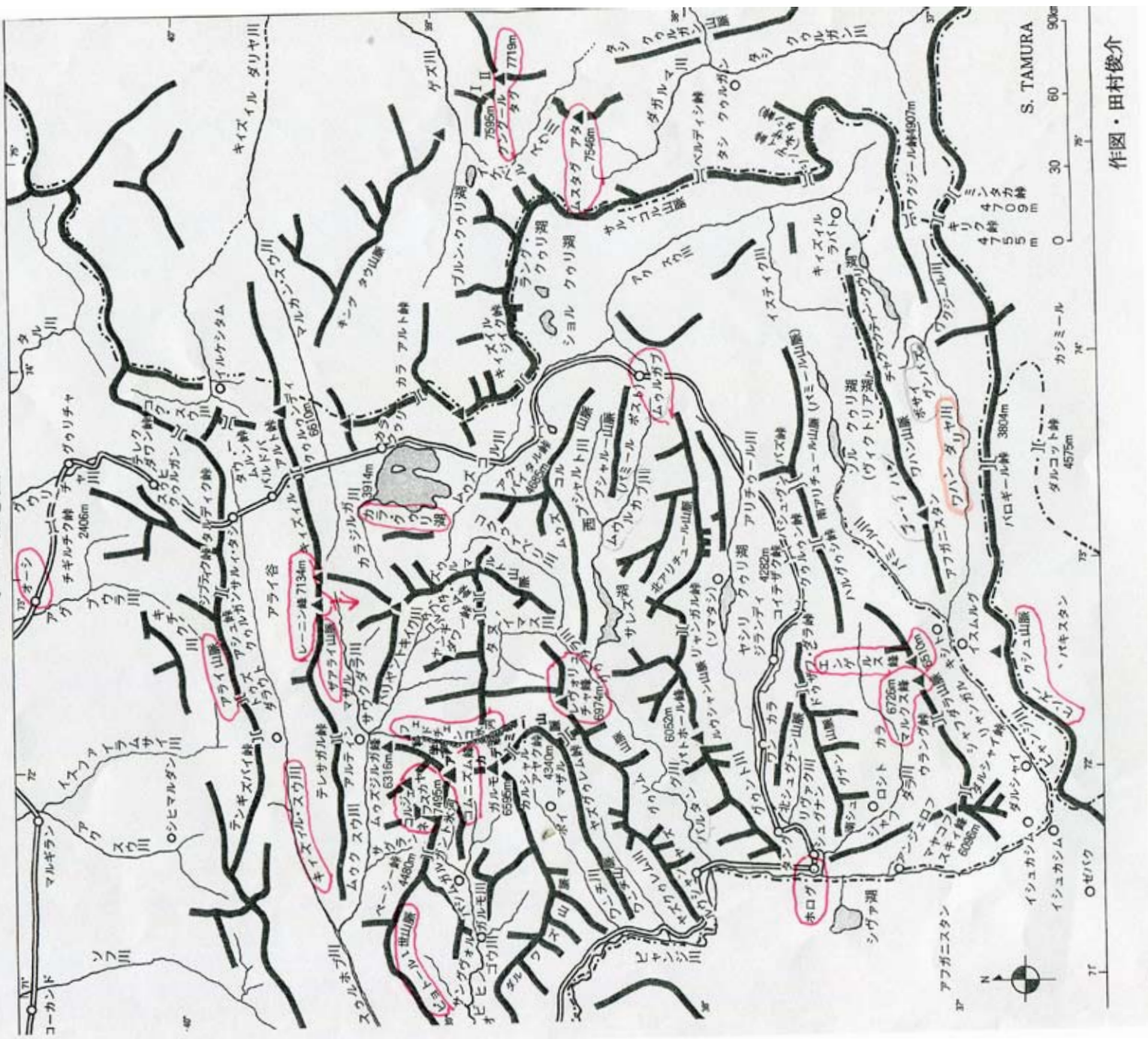


イギリス Bartholomew 1977年のもの。PAMIR となっている。



地図1 赤線で囲った部分がいわゆるパ米尔 直線状の点線は東部・西部・南部の便宜的分割線

地図2 パミール概念図



共同提案者（敬称略 五十音順）

岩田修二（東京都立大学名誉教授『世界の山々』編著）

角張嘉孝（静岡大名誉教授 パミール植林・登山で6回遠征）

神崎忠男（日本山岳協会会長 パミール遠征登山家）

絹川祥夫（学習院大学山桜会 ムスタグ山塊無名峰初登頂）

小疇尚（明治大学名誉教授『世界の山々』編著）

近藤和美（日本勤労者山岳連盟名誉会員 旧ソ連7千米峰三座登頂 ヒマラヤ8千米峰九座登頂）

白坂蕃（東京学芸大学名誉教授）

永田秀樹（元『岳人』編集長）

平井一正（神戸大学名誉教授 京都大学学士山岳会会員）

前田耕作（和光大学名誉教授 オクサス学会副会長）

渡辺悌二（北海道大学教授 パミール環境調査）

提案者代表 田村俊介（パミール中央アジア研究会会長 パミール遠征隊GM 『パミール』編著）

事務担当 本多海太郎（パミール中央アジア研究会事務局長 パミール調査行1～5次）

—この名簿は暫定的なもので、順次賛同者名を加える予定です—